



伯耆大山に 智明大権現を拝する

酒本
幸祐

裾野が広く、美しい山容からは神宿る山を強く感じさせる。(西側から見た大山)

写真提供/伯耆町役場・産業課商工観光室

鳥取県にある大山^{だいせん}を初めて見たのは、3年前の2018年に、島根半島の東端近くの美保関に行った時だった。この時は『古事記』の中で、大国主神^{おおくにぬしのみこと}が高天原^{たかまのほら}から国を譲るよう迫られた時、「この国は天津神の御子に立て奉らむ」と進言して自ら海に身を隠したという事代主神^{ことしろぬしのみこと}を祀る美保神社に行った時だった。その時、海を隔てて遠くに裾野の広い美しい山が見えていた。それが大山だった。遠くにあり小さく見えたが、独立峰でその山容の美しさから神々しいものを感じたことを憶えている。

それ以降、修験道^{しゅげんどう}の盛んだった社寺を訪ねて廻っているうちに、かつて修験道が盛んだった大山に辿り着いた。

修験道とは、日本古来の自然崇拝の信仰に山岳宗教、仏教、ことに密教的なものが習合し、奈良時代後期頃に成立したといわれている。その経緯から修験道は神仏習合が基本的で、神が仮の姿で現れたものとして大権現という称号で祀られていた。

ところが明治元年に新政府は神仏分離令を発し、1200余年にわたって伝承されてきた日本独自の信仰が、大きく変容することになった。併せて明治5

年には修験道廃止令も発せられ、今日のように神社と寺院は別物になり修験道は衰退している。

かつて修験道が隆盛だった社寺を訪ねても、往時を示す資料はあるが、かつての修験道は残っていない。ただ行者、山状としての結社的なものはあり、修験道の復興の兆しはあるように感じる。

神仏分離令の発布から今年は150年目に当る。神社も寺院も組織化され、150年という時の経過の後では、かつての修験道の復興は困難なのだろうか。

ここで大山の概要について紹介する。

大山は鳥取県米子市の南東、大山町、琴浦町、江府町などに在り、標高1,729mの中国地方最高峰である。独立峰の火山で、その造山期は100万年～20万年前といわれている。優美な山容から、鳥取県西部の旧国名の伯耆国ほうぎのくにから、伯耆大山、伯耆富士とも呼ばれている。日本百名山にも選ばれている。

出発にあたって、インターネットで得た情報や大山観光局から送っていただいた資料に目を通した。資料の中には、大山中腹にある大神山神社奥宮おおかみやまじんじやおくみや、大山寺だいせんじのものもあったが、年間6万人余の登山者がいる山だけに、大山観光局の制作したマップは大変によく出来ていた。何度も読み込むうちに、大山の宗教的な歴史の理解度が深まった。

大神山神社奥宮と大山寺は、明治の神仏分離令までは一体のもので、奥宮は智明大権現社いちみょうごんげんじやと呼ばれ、地蔵菩薩が安置され、智明大権現が祀られていた。分離によって、当時、大日如来を祀っていた中門院に地蔵菩薩が移され、後に大山寺となった。智明大権現社は大国主神おおくにのみことの別称である大己貴神を祀り大神山神社奥宮とした。

少なくとも平安時代以降には一体となっていた1社1寺であるが、それぞれの縁起には差異がある。いずれの資料も一般観光客向けに作られたもので、要約されているものであるが、紹介する。

大神山神社のものでは、優美な山容をもつ大山は古より神の宿る山として多くの信仰を集めていて、中腹から山頂の見える所に遥拝所ようはいしよを設けたのが始まりだという。文献上で名前が出てくるのは、奈良時代前期に編纂された『出雲国風土記』で国を引き寄せる網をつなぎ止める杭として、伯耆国の大神岳と



御幸参道本通り。大山寺橋より上部の参道。突き当たりに大山寺山門がある。

して出てくるという。

平安時代になると仏教の影響が強くなり、神仏習合が始まり、神社の祭神の大己貴命と地蔵菩薩を祀って智明大権現の名を称するようになった。

平安鎌倉期になると、「三院百八十坊僧兵三千」までに隆盛になった。とある。(ここでさらっと三院という表現であったが、寺の縁起には三院のことは全く出てこない。この三院が大山の歴史の中では重要な位置をしめる。なぜ僧兵三千が必要なのかも現地を訪ねて理解できた。)

三院については、神社の縁起ではなく、現在、大神山神社の奥宮となっていて、かつての智明大権現社の概要の中に出てくる。大山寺の縁起に出てくるが金蓮上人きんれんしょうにんによって寺が建てられた後、三院が建てられるのだが、三院の位置関係からみて、同時に建てられたとは考えにくく、後には天台宗が統括することになるが、当初は真言宗系の影響もあったのではないかと思う。

三院とは、中門院は大日如来を祀り、現在の奥宮の下方にあり、現在の大山寺となっている。南光院は、釈迦如来を祀り、佐陀川を隔てた右側に位置するが、江戸時代前に流され、現在は釈迦堂跡となっている。西明院は阿弥陀如来を祀り、南光院の下方にあり、現在、阿弥陀堂として残っている。その三院の中心理念として地蔵菩薩があり、最上部に位置する現在の大神山神社奥宮である智明大権現社に祀られていた。

この三院を総称して伯耆大山寺と呼ぶようになって

たのは室町時代以降のことだという。大山を訪ねた時、泊まった宿坊の住職によると、この三院は（流派が違うといわれた）江戸時代初期まで絶えず争っていたのだといった。

大山寺の縁起の方は、永い歴史の中で、開山、権現号、慈覚大師などポイントとなる項目を挙げて説明している。その中でいくつかを紹介するが、先の三院についての項目はない。

開山として、奈良時代・養老2年(718年)出雲の国の玉造の人で依道という方によって山が開かれた。依道はある日、金色の狼を追って大山に入り一矢にして射殺せんとした時、矢の先に地藏菩薩が現れ信心の心がにわかになり、弓を捨てた。狼はいつのまにか老尼と化し依道に話しかけた。このことで依道は出家、仏道の修業をし、山に地藏権現を祀り名を金蓮と改めた。とあった。別説では狼でなく鹿を射殺したとのものもある。

権現号については、平安時代、村上天皇の詔により大山権現(地藏権現)を大智明権現とした。

慈覚大師については、1100年ほど前、天台宗の高僧・慈覚大師が当山に顕密両教と共に「引声阿弥陀経」の秘由を伝え、当山の行者は帰依し修験道から天台宗に列した。とある。

豪円僧正では、慶長年間、豪円僧正は当時の座主となり、本坊・西楽院にいた。山の法規を定め42の山内支院をもって寺運の挽回を計り、幕府に請って3千石の寺領を得た。とある。これは別の資料では、江戸時代に入り検地が厳しくなり、寺領の一部が没収されたが、豪円僧正が幕府に働きかけ寺領3千石が安堵されたという。また豪円は山内の法規を定めるなど

して、これを機に、先の三院の争いは沈静化したのだと、宿坊の住職は教えてくれた。

歴史をみると、明治になって神仏分離、修験道廃止により、かつて修験道が盛んだった社寺は、その姿を変えてきている。ここ大山でもその観は強い。明治元年から今年で150年。千年余にわたって伝承されてきた日本独自の宗教が失われていく。この現実をいかに考えるべきか、その智慧をもたない。

今回の大山への参拝は、その現実を踏まえたうえで、大神山神社、大山寺を訪ねて、参拝時に、「南無智明大権現」と唱えて、自身の心の中で、150年



大山町作成の「大山寺地区散策マップ」部分



佐陀川に掛る大山寺橋。大山山頂部から流れ出している。



宿坊・山楽荘の前庭。「とつとり名木 100 選」にもなっている大山の大杉がある。

の時を超えて、神仏を習合しよう、したいとの強い思いを持っての出発だった。

令和 2 年、長い梅雨が明けて猛暑となった 8 月 3 日、午前 9 時 25 分発米子空港行きに乗ろうと出発したのだが、京浜東北線の車輻故障で、東海道線まで 30 分ほども止められてしまった。いつも飛行機に乗る時はシニア割引を利用している。この割引というのはシニアへの愛情ではなく、空気を運ぶくらいならといったもので、割引は当日しか買うことができない。いつもなら並ぶことも考えて 1 時間余は余裕もっているのだが、コロナ流行で乗客も少なからうと、いつもよりゆっくりしていた時、30 分の足止めとなり、チケット売場に到着した時は、タッチの差で販売締切となってしまった。

コロナ流行で減便中でもあり次便は午後 2 時 30 分ということだった。中止というわけにもいかず、ひたすら忍耐と無為な 5 時間を登場口で過ごした。この 5 時間のロスをどうすべきかを考えたが妙案なく、とにかく米子に着いてからのことだと居直った。

3 時 50 分米子空港に到着。小さな空港なので玄関口までは早く出ることができ、タイミングよく 4 時 10 分発、JR 米子駅行きのバスに乗り込んだ。当初はここから電車で JR 米子駅に向う予定だったが、とにかく乗り込んだ。バスは停留所が多く、米子駅まで約 1 時間を要した。最初の予定では、午後 2 時発のバスで米子駅から大山登山口まで観光道路を通過して約 1 時間ということだった。比較的ゆとりのあるスケジュールで、大山登山口周辺で散策しよう

と考えていた。

ところが、米子駅から大山に行くバスは最終の午後 6 時 10 分しかなかった。どうしたものかと思案の末、駅前で客待ちしているタクシーに乗った。バスでは 1 時間かかるが、タクシーだと 30 分ほどで着くといった。バス料金の約 5 倍はかかるが、今夜の宿のことを考えると仕方ないことだった。

タクシーに乗ってやっと落ち着いた。ここまで景色を眺めるといった気分ではなかった。

米子市は山陰の小さな街で、ビルなどが建つ中心部を出ると、平坦地に田畑や雑木林が広がるのどかな景色が続いた。運転手は 70 歳だといったが、こののどかさに魅かれて移住してきたのだといった。冬には雪が積るが、人もよくともかく住みやすいのだもいった。大山のことを聞くと、数年前に登ったが本当にいい山だといったが、その口調から、山に魅了されているのが分かった。

観光道路は米子市街を出ると緩くなったり急になったり、登り続ける道だった。後で聞いたのだが、終点の大山登山口は標高 750 m だといった。

タクシーは広い駐車場のある登山口に着いた。今夜の宿は大山寺へと続く御幸参道本通りを登り切った左側にある三楽荘だった。大山で唯一の宿坊だった。夏の日はまだ明るくはあったが、午後 6 時前だった。運転手は、宿のことは知っていて、坂はきついよといい、料金メーターを切って、宿まで乗せていくと親切にしてくれたが、明日の予定もあり、マップで調べていた大山寺橋まで乗せてもらった。

昔から大山へは、山頂から流れ下る佐陀川の両岸から登っていったのだろう。道のない原生林を登るには、川筋に沿って登るしかなかったのだろう。それが現在の登山道になっている。

その名残りからか佐陀川には対岸への道が、上ワタリ、中ワタリ、下ワタリとしてある。その下ワタリに大山寺橋が掛かっていた。橋の上に立って上流を見たが、佐陀川は水量は少なく、川底には玉石が敷き詰められたように転がっていた。洪水の時などは激流となるのだろうと想像した。

大山寺橋から御幸参道本通りまで戻り、通りを登り始めた。平日の日暮れとあって人通りはほとんどなかった。大山寺橋までの通りは左右に旅館や食堂、土産物店があったが、ここからの道は空気が一変した。左右に2、3軒の民家があるだけで、大山の山気を強く感じた。これが大山なのだ納得した。

山楽荘までは200mもない距離で、道は舗装されているのだが、とにかく急坂で、自家製の金剛杖で後方を突き、腕の力で押し上げ、何度も立ち止まっては登ることを繰り返した。

左側に山楽荘の看板があり、未整地の広い駐車場の奥の段階の先に、木々に覆われた山楽荘の玄関が見えた。なんとか日没までに宿に辿り着いた。

山楽荘は大山寺の塔中寺院で観證院が経営している。客室も多くかなり規模の大きな宿坊だった。玄関は日本旅館を思わせる造りで、建物全体が山の中にある。広くはないが前庭の植込みと山の木々が一体となっていて、心が山中へと開放されていく思いがした。この庭には、とつとり銘木100選にもなっている「大山の大杉」があった。

山楽荘の住職は夕食の配膳を自らも手伝い、食事前に献立の説明もしてくれた。住職自らということに、宿坊のありがたさや、仏の心を感じる宿泊者も多いのではないかと思った。

夕食後に、下調べしておいたことについて質問した。大山寺の始まりでもある三院の争いのこと、それゆえ各院千人の僧兵が必要であったことなどを教えてもらった。大山寺の資料に書いている「戦国時代になると寺も僧兵がいないと守れない時代になった」との説明とは微妙に異なっている。

翌朝、午前4時に部屋の外から聞こえてきた、野生動物の鳴き声で目が覚めた。外は真暗だったが、宿で唯一用意されている玄関外の喫煙所へ行った。行燈型の灯の横に小さな腰掛があり、明りが届く以外は真黒の闇だったが、空気を通して山気がひしひしと伝わってきた。

行燈型の明りの側面に「^{みざん}弥山より 綱をたよりに 登れよと 無明の闇に 慈悲の声聞くと大山寺のご詠歌が墨書されていたのが印象深く、信仰の山に身を置いていることを強く思った。

午前8時半に宿坊を出た。通りに出ると50mほどの所の石階段の上に二層の立派な大山寺の山門が見えた。相変わらず急な坂を登り、階段下に着くと、左側に大神山神社奥宮への石の鳥居があった。

蹴込みの高い歩き難い石段を上がり、山門を抜けると、本堂下の境内があり、左手に寺務所があった。隣りに観音堂があり、中国観音霊場29番札所になっていた。寺務所には男女二人の年輩の職員がいて、本堂内で参拝がしたくて祈願をお願いしたが、住職不在のためできないと断られてしまった。やむえず



大神山神社奥宮への参道入口にある鳥居。



大山寺入口にある二層の山門。



広い境内正面に建つ大山寺本堂、右が鐘楼。

お札をいただいたが、ここには智明大権現と印刷されていた。再び本堂のある境内へと石段を上がった。石段を上り切ると境内右端に出た。鐘楼があり、その隣りに大きな本堂があった。境内は広いのだが砂利を敷いただけで、埃っぽい感じで、周囲は木々に囲まれているのだが、殺風景な感はいなめなかった。

少し開いた本堂正面扉の間から内部が見えるのだが、暗く灯明の灯りがポツンと見えるだけだった。その灯明の方に向かって「南無智明大権現」と手を合せて唱えた。

ここが、かつての中門院で大日如来を祀る堂だったのだが、現在の本堂は昭和3年の火災で全焼して再建されたもので、地蔵菩薩が祀られている。

大神山神社奥宮へは、大山寺を下りて、先ほどの鳥居から登るのだが、ここまで登ってきているので、大山寺本堂左側から奥宮への参道途中に出る道があり、この道を通った。帰路に鳥居へ下ることにした。

奥宮への参道は石畳の参道といわれ、自然石を道



大神山神社への石畳の参道。木々に囲まれて美しいのだが、歩き易いともいえない。

幅いっぱいにならべて造られている。昭和15年、皇紀2600年を記念して整備されたもので、長さは入口の鳥居から奥宮まで約700mだという。見た目には自然石が並び美しいのだが、石の表面に凸凹があり、石の間に空間もあり、健脚の人なら飛び石を歩くように問題ないのだろうが、歩き易い道とはいええない。一步一步、足の踏み所を考えながら登っていった。

参道脇にはこの山の信仰を表すように地蔵菩薩の石像が点在していた。

ようやく登り切り、正面の石段の上に大神山神社奥宮が見えたところの左側に、昔の本坊西楽院跡があった。現在の奥宮、明治以前は権現社のすぐ下に本坊があることを考えると、明治以前は神仏習合とはいえず寺院の勢力の方が強かったことが分かる。

奥宮の前庭は狭く、左右に長い建物であり、前に立って全体を見ることはできない。奥宮は明治以前は大智明権現社といわれ、承応2年(1653年)に建立されたが、寛政8年(1796年)に火災で焼失、文化2年(1805年)に再建されたものである。壮大な権現造で、本殿・拜殿を幣殿で結び、拜殿の左右に長い翼廊があり、全国最大級の権現造といわれている。

建物中央部の拜殿に入ると右側に社務所があり、若い神職と宮司がいた。拜殿内に座って参拝しようと祈願をお願いした。若い神職が祈願祭の準備ができるまで宮司に質問してみた。この奥宮のある辺りが標高900mで、大山の中腹に当り、神社の縁起にある遥拝所を設けたというのも、寺の縁起にある金蓮上人が寺を建てたというのも、この辺りだったの



大神山神社奥宮の下にある本坊・西楽院跡。敷地の広さから大きな建物だったことが想像される。



大神山神社・奥宮。拝殿の左右に長い翼廊をもった立派な権限造の建物。長い時を感じさせる風格がある。



下山神社の社殿。

ではないかと。宮司の話では、奥宮左側にある下山神社の前から、奥宮の社殿越しに大山がよく見えるとの話があった。

祈願祭の準備ができ、靴をぬぎ幣殿内に座った。幣殿内は天井も高く格天井となっていて234枚の花鳥人物の彩色画があるそうだ。

神社での形式通りの祝詞奏上であったが、丁寧な祈願祭であった。正面奥の本殿には大己貴命が祀られているのだが、神職がいるため、心の中で「南無智明大権現」と唱えて、玉串を奉奠した。

祈願祭を終えて、宮司の言った下山神社に向った。下山神社に掲げていた略記を見ると、元徳2年(1330年)大神山神社を尊信していた備中郡司・渡邊日向守一子、照政公は参拝の帰路奇禍に遭い不慮の最期を遂げ、人々はこれを憐れみ子祠を建て下山神社と呼んだ。数々の靈験があり、後、夢のお告げによりこの地に奉遷された。現在の社殿は石州津和野領主・亀井隠岐守矩賢公によって文化2年(1805年)に再建されたものである。とあった。

下山神社の前に立って、奥宮の社殿越しに大山を見たが、霞んで全く見えない。予定より早く進んでいるので、晴天でもあり待てば霞は消えるのではないかと待ったが、なかなか大山は見えない。結局1時間ほど待って、やっと輪郭が分かるほどの写真が撮れたので、奥宮拝殿前で一礼して下ることにした。



郵便ポストが印象的な大山寺下の茶屋。



大神山神社奥宮の社殿越しに見える大山。

帰路の石畳の参道は、登りよりはるかに厳しかった。重力で体が前に引かれるのを、長い杖で前方を突き、腕で体を支え一歩ずつ下った。転ぶと大変だとの一心で、汗びっしょりでトロトロ下った。その姿を見た人は滑稽だったろう。登る時に大山寺の方から入った地点を過ぎ、ようやくの思いで、奥宮の鳥居を出た。

鳥居を出て、大山寺への石段の登り口の角に、旧型の丸い郵便ポストが印象的な茶屋に入った。サービスの冷水をお代りしてやっと人心地がついた。

再び、御幸参道本通りを下りながら、大山寺、大神山神社奥宮で「南無智明大権現」と唱えて、150年の時を越えて自身の中で神仏を習合したのだが、果してと思うとともに、神仏の御心とは、旧約聖書のモーゼの奇跡のように劇的に示されたことはない、過去の経験からよく分かっている。まずは帰路の無事を願うばかりだった。

これからバスを乗り継いでの帰路はもう一泊必要であり、少し遠いが足をのばして、大山の存在を教えてくれた美保関まで行き、以前の宿に泊まり、再度、美保神社に参拝する予定だった。